

中国人学習者の二種類の「けど」類に関する知覚 —聴取実験に基づく検討—

田昊

一橋大学 言語社会研究科

tianhaodengkou@gmail.com

1. はじめに

話し言葉において、「けど」類が現れる発話は、「言い切り」であるかどうかにより、以下のよう
な2種類に分けられると考えられている(白川
2009)。

(1)「黒でもいいけど、あんまりきれいじゃな
いでしょう。」

(2)「言っていていいかわかりませんけど。」

ここで、「けど」類とは、「けど」・「けれども」・
「けれど」・「けども」・「が」をさす。

(1)のような発話における「けど」類(以下、
継続型の「けど」類)は、発話の継続を表し、従
属節と主節を接続する接続助詞(益岡・田窪 1992)
であるとされているのに対し、(2)のような発話
における「けど」類(以下、終了型の「けど」類)
は、発話の終了を表し、「言いさし」の「けど」
類(白川 2009)として捉えられることが多い。

そこで、本発表では、CSJに収録された音声資
料を音声分析ソフト Praat により刺激文を作成
し、日本語母語話者と中国語母語とする学習者と
いう2つの被験者グループに提示して聴取実験
を行うことにより、日本語母語話者と日本語学習
者の知覚上における判別要素及び中国人日本語
知覚状況を考察する。

2. 実験の流れ

2.1 発話データの収集

音声分析ソフト Praat を使用して、CSJ に収
録された音声資料から「けど」類が含まれる発話
を抽出し刺激文を作成した。また、発話スタイル、
タイプ(筆者と日本語母語話者三名と判断の結
果)、句末音調のバランスを考え、刺激数は50に
した。なお、上昇下降調の「けど」類発話には、
接続助詞の「けど」しか見られないので、10とし
た。

2.2 ExperimentMFC ファイルの準備

ExperimentMFC ファイルは、選択肢として2
つのボタンに表示する文字列を順に明記する。本
実験では、一回目に提示される際に「継続」とい
う選択肢を画面左側のボタンに、「終了」という
選択肢を右側のボタンに表示し、二回目に提示さ
れる際に、「継続」という選択肢と「終了」とい
う選択肢との位置が変わるように設定する。

また、各刺激は、それぞれ合計2回提示するこ
とを設定する。さらに、全ての刺激が一回ずつラ
ンダムな順序で提示され、その後別のランダムな
順序で一回ずつ呈示される、ということを繰り返
す。その際、同じ刺激が連続して現れることがな
いように調整する。

このように、「接続助詞」としての「けど」類
発話と「言いさし」としての「けど」類発話につ
いて、それぞれ50個(2回の繰り返し×25個の

表 1 ロジスティック回帰分析の結果

パラメータ	母語話者		学習者 FH		学習者 FM		学習者 SH		学習者 SM	
	推定値	p 値								
(切片)	-15.22	<.01	-1.33	<.1	-0.70	n.s.	-1.56	<.05	-1.57	<.001
F0 値	-16.01	<.01	-2.08	<.01	-1.75	<.01	-1.98	<.01	-1.84	<.001
モーラ長	5.84	<.05	0.37	n.s.	0.14	n.s.	0.47	<.1	0.08	n.s.
BPM	-16.80	<.001	-2.34	<.001	-1.39	<.001	-1.94	<.001	-1.38	<.001

刺激) の音声サンプルと実験用の ExperimentMFC ファイルを作成した。

3.3 実験の実行

3.3.1 被験者

本実験の被験者は、関東圏在住の日本語母語話者 10 名、日本の日本語学校に在籍している中国人日本語学習者 20 名、及び中国の大学に在籍している中国人日本語学習者 20 名である (すべて非聴覚障害者)。

また、日本語母語話者、JFL 上級学習者、JFL 中級学習者、JSL 上級学習者、JSL 中級学習者、それぞれ JPN、CHNFH、CHNFM、CHNSH、CHNSM と記す。

3.3.2 提示方法

聴き取り実験では、被験者に音声サンプルをランダムに聞かせながら、画面上に選択肢のボタンを提示し、判断してもらった。また、刺激 20 個おきに被験者に休憩を入れた。

4. 結果の分析

反応「継続」「終了」の二値を従属変数、発話末の F0、発話の最終モーラ長、および句末音調を独立変数とするロジスティック回帰分析を行った。

具体的に、本実験では、同じ刺激に対し、全ての被験者が二回ずつ判定するという繰り返しを伴うデータであるため、その影響を考慮する必要がある。そこで、刺激と被験者によるクラスターを考慮した一般化線形混合効果モデルを用いた。ランダム効果としてはランダム切片のみ考慮した。

また、分析には R の `glmer` 関数を用い、二項分布とロジットリンクを指定した。なお、日本語母語話者のデータでは、上昇下降調 (HL%) の場合の反応が全て「継続」で「終了」が 0 件であり、分析上問題が生じることから、二種類の「けど」に対し類似した傾向を示す上昇調・上昇下降調を「上昇成分を伴う音調」(Boundary Pitch Movement, BPM) として一つにまとめて分析した。結果を表 1 にまとめて示す。

日本語母語話者の結果を見ると、すべての特徴量 (パラメータ) が有意である。まず F0 値を見てみると、負の係数を持っており、F0 値が低くなるほど終了と判断される確率が高まることを意味する。モーラ長は正の係数であることから、発話の最終モーラ長が長いほど終了と判断される確率が高まる。句末の音調については、上昇成分を伴う BPM の場合に終了と判断される確率が

低くなる（継続と判断される確率が高まる）ことが、つまり下降調の場合に終了と判断される確率が高まることが分かる。つまり、日本語母語話者はこうした特徴を利用しながら継続か終了かを判断していることが示唆される。

一方、中国人学習者の結果を見てみると、日本国内でN1を持っている学習者SH以外は有意差が見られず、またSHにおいても有意傾向しか見られない。つまり中国人学習者は、日本国内か中国国内か、上級か初級か、どの学習環境・学習レベルにおいても、発話末のモーラ長を発話の終了・継続の判断にほとんど用いていないことが示唆される。

また、推定値の絶対値の大小を日本語母語話者と比較すると、いずれの特徴量の係数についても、日本語母語話者よりもかなり小さな値を示している。このことは、発話の終了・継続の判断に関してこれらの特徴量の影響が相対的に小さいことを意味する。

5. 考察

以上の分析を踏まえ、中国人学習者は、二種類の「けど」類に関する判別基準および「言いさし」の「けど」類に関する認識は、まだ明確ではないことがわかる。

まず、学習者は、どうして発話末の引き伸ばしを「言いさし」「接続助詞」の判断パラメータとして認識しないのだろうか。これは日本語教育現場における「言いさし」の「けど」類の扱い方に関係すると考えられる。現在の日本語初級文法教育では、「言いさし」の「けど」類を会話文で取り上げることが多いが、「お願いがあるのですけど」のように、文字上の提示しか行われておらず、

音声面に関する指導および音声・文法の関連性について重要視されていない。

一方、「ます」・「です」のような完全文に生じた「母音の無声化」が重要視されているため、必ず提示されている。そこで、学習者は、アニメやドラマなど、様々なメディアを通して現実の日本語発話に接触する機会もあり、「です」・「ます」で終わる際に軽く発音されることは定着している。一方、他の形式で終わる文への接触は少ないため、文末の音の引き伸ばしに注意しないかもしれない。従って、初級段階以降で「言いさし」を一つの項目として取り上げたり、バリエーションに関する説明・練習をしたりすることが行われないため、文末の引き伸ばしとの関係は、学習者の中で定着していない可能性がある。

また、4節の分析から、中国人学習者は、F0の変化と発話意図の関連性が定着されておらず、F0値の高い刺激文も「言いさし」として知覚していることがわかる。

今回の二種類の「けど」類に関する聴取実験の結果からも、特に学習者の誤判断した刺激を見ると、多くの学習者は、下降音調を唯一の手がかりとして判断していることから、発達上のプロセスの一つである「過剰般化」という習得プロセスを使っていることと言えるだろう。

「学習者は、母語の音韻的特徴の意味付けとの違い、そして何よりそれに先立つ韻律情報の知覚の違いから、日本語母語話者との間にズレが生じる可能性がある」（林他 2011:91）。但し、学習者は、そもそも刺激文の発話末のピッチを日本語母語話者と同じように知覚できるのだろうか。フォローアップ・インタビューの結果によると、学習者は確かに発話末の高低が知覚できることがわ

かる。

学習者の耳が、第一言語である母語を習得する際に、自分の母語に重要な特徴に的確に反応するための言わば「精密機器」として訓練されており、「物理量である基本周波数変化と持続時間長を「高さ」と「長さ」という心理量として知覚するにあたっては、「知覚の移転」が生じる様子が観察された」(林他 2011:89) ため、目標言語を習得する際に、聴解面においても母語転移が生じると判断できる。日本語母語話者よりも発話末のピッチの知覚が鋭敏であることから、音調言語である中国語を母語とする日本語学習者は、日本語を習得する時に、ピッチの知覚に関して正の転移が起こることがわかる。

しかし、中国人学習者は、発話末のピッチの知覚が日本語母語話者より鋭敏であるにもかかわらず、正しく知覚できないということは、学習者は二種類の「けど」類の判別、特に「言いさし」の「けど」類の理解がまだ明確に定着していないのではないかと考えられる。その理由は、発話末のピッチの変化と発話意図との関連性が定着していないためではないだろうか。

6. 終わりに

本発表では、日本語母語話者と中国人学習者に「けど」類の判別聴取実験を行った結果、学習者は、最小 F0 値の変化と発話意図との関連性が定着しておらず、母語からの転移がみられること、文末の引き伸ばしと発話意図の関連性が定着しておらず、習得上における「過剰般化」がみられることがわかった。さらに日本語学習者のレベルが上がっても知覚状況は日本語母語話者と相違が見られた。

実験結果を踏まえ、現在の日本語教育における「けど」類の指導について。聞き方の指導に工夫する必要があり、中国人学習者に対して「けど」類の指導を行う際に、発話の理解を助けるストラテジーとしてプロソディ情報や発話末の引き伸ばしの応用も提示すべきであるといえる。

謝辞

本稿の執筆にあたり、懇切丁寧に指導して下さった国立国語研究所の小磯花絵先生に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』くろしお出版
益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版』くろしお出版
林明子・西沼行博・谷部弘子 (2011) 「日本語の発話末韻律の産出と知覚」『文法記述の諸相』、pp.65-97、中央大学出版部